

華中・華北の後期旧石器文化

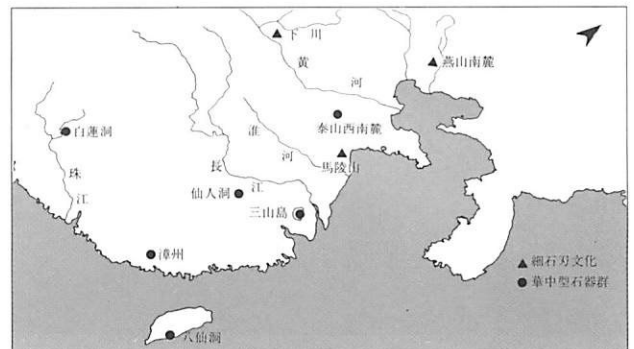
平成8年12月、中国江蘇省の蘇州市博物館を訪れる機会に恵まれ、太湖三山島の旧石器を見学することができた。この石器については、陳淳氏らが、フリントなどを用いたもので、小形の剥片や石核が多く、狭義の石器には削器、尖頭石器、石錐、敲打器があること、多くの剥片に鋸歯状の使用痕がみられる点が特徴と報告している。今回の見学でも、一般的に小形であり、剥片の多くには打面調整や頭部調整、さらには二次加工もほとんどみることができないことを確認した。さまざまな調整を用いない単純な手法で剥離した剥片を、そのまま利用するという石器使用のあり方を推定できる。筆者がかつて実際に観察した資料では、広西チワン族自治区白蓮洞、台湾・八仙洞の石器群と類似していた。また、江西省仙人洞下層や福建省漳州などの石器群も同様の特徴をもつようで、この種の石器群は、中国大陸の華中以南の海寄りの地域に展開しているといえる。ここでは、これらを華中型石器群と仮称する。この華中型石器群は、発達した骨角器が共伴した可能性が高く、こうした石器の単純さは、石器への依存度が低く、石器の役割が比較的限定されていたことを反映していると考えている。華中型石器群の年代は、白蓮洞や仙人洞の年代測定値から約2万年前以後、後期旧石器時代末である。この時期、淮河―秦嶺山脈以北では細石刃文化が展開する。細石刃文化では、石器は華中型石器群と大きく異なり、様々な器種に分化しており、道具の中できわめて大きな位置を占めていたとみることができる。

こうした南北の石器の差はなぜ生じたのだろうか。一つには、それぞれの石器群がおかれた環境差と、それに起因する生活様式の違いによると考えている。華中型石器群が分布する地域は、より低緯度で、海にも近いことから、比較的温暖で氷期の影響も少なく、森林が優勢であったとされている。華中型石器群の遺跡では、遺物量の比較的多い洞穴遺跡が多く、出土する動物種も多種で、食用にした淡水性巻貝の貝層をもつ例もしばしばみられる。これらから、さまざまな資源を利用しつつ、比較的長期にわたる固定的なベースキャンプを中心とした生活

様式を想定できる。比較的多種の資源が分散して存在していたと考えられる森林環境下で、華中型石器群を残した人びとは、ある特定の資源を偏重することなく、多様な資源を利用することで、さまざまな危機を回避する戦略を選んだようである。逆に、細石刃文化が盛行した地域は、最終氷期の影響が強く、乾燥化が進み、草原が優勢であったところである。細石刃文化では、河北省の燕山南麓や山東・江蘇両省の馬陵山、山西省の下川など、小規模な遺跡が密集して分布するケースが多く、遺跡からはシカ・ウマ・ガゼルなど、比較的限定された種類の動物骨が出土する。これらから、細石刃文化の集団は、特定の動物の狩猟に依存、頻繁な移動を繰り返す生活を送っていたと判断している。草原という、少種の資源がパッチ状に分布したであろう環境下で、細石刃文化の人びとは、少数の資源に依存度をたかめ、これを効率的に利用する戦略をとったと考えられる。こうした生業様式の差が、石器・石材に対する依存度の差を生み、大きな外見上の差異が顕示されたのだろう。

ここで興味深いのは、山東省の泰山西南麓や河北省黄驊などから、華中型に類似した石器群が検出されていることである。後期旧石器時代末期に、細石刃文化が展開していた地域の一部で、細石刃文化から華中型石器群への転換、つまり生活様式の転換がおこなわれていた可能性を示すからである。また最近、華中型石器群・細石刃文化いずれでも、1万年前以前にさかのぼるきわめて古い土器が共伴することが判明してきた。華北の新石器文化の源流がどちらにあるかを考える上でも、この現象は重要であろう。華中・華北の後期旧石器文化には多くの未解決で興味深い問題が残っている。今後とも、研究を続けたい。

(加藤真二／平城宮跡発掘調査部)



関連遺跡分布図